つくばのばづくり

Our Third Place of Tsukuba

つくば地域まちづくり インタビューブック

世界のあしたが見えるまち。TSUKUBA

つながるって、いいな。

都会だけれど、田舎でもある。

そんなつくばには、

つながり合うことを歓び楽しむ文化がある。

ポストコロナの新しい生活。

おうち時間もいいけれど、

おうちの近くで誰かと過ごす時間も、

見つめ直してみたい。

つくばには、地域で生きる

楽しみがあるのだから。

本書は、つくば市内で“つながりづくり”の活動をしている皆さまのインタビュー集です。ぜひ活動を見て、参加して、いつかはあなた自身もつながりづくりを始めてみてください。

COFFEE
ルワンダ

Interview01 Mokkun Coffee

もっくん珈琲

地域の人から研究者まで。
異なる価値観が交わる化学反応が起きる場所。

市内のイベントやフェスの常連店「もっくんカフェ」の川村宜央さん・葉月さんご夫妻が、大曽根地区に自家焙煎珈琲店「もっくん珈琲」を構えたのは2019年5月のこと。お客さんが4〜5人も入ったらいっぱいになってしまうけれど、店にはいつも地域の人や大学生、主婦にOLに研究者まで、多様な人が集ってくる。目当ては、自家焙煎のコーヒーだったり、店主の川村さんたちとまったり話すひとときだったり……。

「ほんとにいろんなバックボーンのお客さんが来てくださって、意図せずごった煮みたいなペアリングに。この狭さなので初めましての方が相席になることも多く、本来なら話すはずもなかった人たちが会話を始めるんです。不思議な化学反応が起きているのを見るのが、楽しいし、嬉しいですね」

そんな川村さんご夫妻の住まいは、開発が進み人口が増え続ける新興住宅地・花畑地区。一方、店のある大曽根地区は人口減が続いており、すぐ近くにありながら対照的なエリアだ。

「子どもの小学校の学区内だから」という単純明快な理由で大曽根地区を選んだ花畑住民の川村さんたちの存在は、結果的に性格の異なる2つの地域を結びつけることにもなった。

「もともと人と会ったり話したり、つながりを作ったりするのが好きで、店舗の2階をいろんな人が集えるフリースペースにしたいと考えていたんです。そんな時、たまたままちづくりの協議会の活動に誘われて。そこでは大曽根の区長さんが“このままでは町が滅ぶ”

という危機感を抱えていたし、一方の花畑の区長さんも“今は人が一気に増えているけど、30年後には大曽根と同じ道を歩むだろう”と同じように危機感を感じていたのが印象的で、活動に参加するようになりました」

使命感というよりは、人が好き。そんな自然体な川村さんたちの人柄もあり、徐々にもっくん珈琲は地域コミュニティの拠点的な場所にもなっていく。ある時は子ども達の放課後のたまり場に、ある時はPTAの作業場に、ある時はお茶会やワークショップの会場に、ある時はまちづくりの議論場に。

「コミュニティって、つながりの連続でできるものだと思うんです。マルシェやイベントなど高いテンションでがんばるものも大事だけど、テンションの低い活動をずっと続けていくことの方がもっと必要ですよね。自分の言葉でいうなら、それはお友達をつくること。そのお友達が勝手に横につながっていき、それがいつのまにか地域のつながりになっていったらいいなって思っています。ここでじーっと待ちながら、勝手に化学反応が起きるのを、小さな仕掛けを作りながら待ち続ける。それが私たちにできるコミュニティづくりなのかなって思っています」

■ もっくん珈琲

つくば市大曽根3439-1　☎ 029-811-6833

※店舗営業だけでなく、移動販売・ケータリングも継続中

http://mokkuncafe.web.fc2.com/

川村宜央さん・葉月さんご夫妻は、筑波大学で自然科学を専攻していた同級生。珈琲店を営む傍ら、「地球レーベル」という団体を立ち上げ、自然科学の普及活動も行っている。

Interview02　Hana no Ki

華の幹

細く長く、楽しく続ける。
じわじわ育むみんなの古民家。

筑波山麓の小田地区にある古民家を再生・活用している「華の幹（はなのき）」。東日本大震災が起きた2011年に、現在NPOの代表を務める飯塚洋子さんがクラフト作家仲間5人で“掃除”から始めた活動が、今では60人もの仲間たちが支え合う活動へと広がっている。

もとは飯塚さんの夫のおばあちゃんの実家だったという古民家・華の幹。飯塚さん自身、おばあちゃんの晩年に介護をしながらよくこの家の話を聞いていたという。

「最後に住んでいたのはおばあちゃんの弟の奥さんでしたが、脳梗塞で倒れて施設に入ることになり、空き家になってしまっていました。跡継ぎもいないしあの家はなくなってしまうのかなって、おばあちゃんがよく心配していたんです。昔は近所の人が集ってくるとても

NPO法人「華の幹」代表の飯塚洋子さん。華の幹の名前の由来は、飯塚さんの夫のおばあちゃんの名前「幹(もと)」。そして、「おばあちゃんが話していた華やかな家を蘇らせる！」という想いが込められている。

華やかな屋敷だったんだよって」

やがておばあちゃんが亡くなり、空いた時間で趣味のクラフト作家活動を始めた飯塚さん。作家仲間とマルシェができる場所を探しているなかでふと、おばあちゃんが話していた実家の古民家（現・華の幹）のことを思い出したと言う。

「当時は建物が見えないくらい草木が鬱蒼と生い茂って、まるで森の中の廃墟のようになっていました。家族はみんな“ぼろ家”って呼んでいたくらいで。でも、強風の時に一度雨戸を直しに行った時に、よく見るととても立派な造りで、これっていわゆる“古民家”なんじゃない？って心に残っていたんです。あの家を綺麗にすることで作家仲間の遊び場を作れるうえに、おばあちゃんの大切な実家も蘇らせることができるかも！と、仲間を誘って再生を始めることにしたんです。とはいえ初めは、あまりの惨状に仲間もみんな絶句していましたけどね（笑）」

それから約3ヶ月、ほぼ毎日掃除に来て建物を磨き上げ、2011年7月の小田祇園祭で初お披露目。ハンドメイド品の販売や縁日を行い、約100人もの人が訪れたという。さらに同年10月の筑波山麓秋祭りでは16店舗が出店するハンドメイド市を行い大盛況。その後もコンサートや期間限定のカフェを開くなど、少しずつ活動の幅を広げていった。そして、観世流能楽師で重要無形文化財総合認定保持者の高梨良一氏との出会いから、2013年からは「能に親しむ会」がスタート。毎年、数百人を動員する名物イベントとなっている。同時に子どもたちを集めて能の教室も始まった。

「初めはほんとにお金も技能もゼロから始まりました。でも、何もないところからがんばってやっていくなかで、少しずつコミュニティができて、イベントも自然と大きなものができる実力がついていきました。地域おこしの成功例と言われることもありますが、できる範囲でじわじわ活動しているうちに、地域おこしはおまけでついてきたようなもの。とにかく自分たちが楽しむこと、人のつながりを宝物に思うこと。それが長く活動を続けられている秘訣だと思います」

■ 華の幹（はなのき）

つくば市小田3034　☎ 080-5544-5360

https://www.facebook.com/oda.hananoki/

Interview03 Jimmy Farm

ジミーファーム

子どもたちの豊かな成長を夢見る、“交流できる”パパイヤ農場。

「ジミーfarm」代表の“ジミーさん”こと柳下浩一朗さん。「子どものまま大きくなったってよく言われます」と話すジミーさんは、とにかく地域愛と人間愛に溢れている。

「ジミーfarm」は、元小中学校教諭の“ジミーさん”こと柳下浩一朗さんが営む、つくば市上郷にあるパパイヤ農園。2019年にスタートしたばかりだが、いろいろあってパパイヤ農園としては日本最大規模の面積に。ちなみにジミーさんが育てているのは果物のパパイヤではなく“野菜”のパパイヤ。寒冷地での露地栽培が可能な青パパイヤ品種「サンパパイヤ」を農薬を使わず有機農法で育てている。

「教員生活は32年間。55歳の時に早期退職をして、妻の実家であるこの場所で農園を始めました。農業は初めてだったんだけどね、実は51歳から5年間、オーバーワークが原因で不眠症になっちゃったの。うつ病も併発してずっと外に出られずにいたんだけれど、ある時この家の窓から見える素敵な田園風景の中に、草ボウボウになっている一角が見えた。そこを綺麗にしたいなぁって。突然、生きがいにできそうなことが見つかったんだ。それが農業を始めるきっかけでしたね」

調べてみるとそこは、相続者がおらず国庫帰属となり荒れてしまっていた土地だった。そこでその土地を国から購入し、ジミーファーム1号と名付けて土作りを始めた。そんな折に、友人の紹介で出会ったパパイヤのエネルギーに感動して、パパイヤ栽培を始めることにしたと言う。

　そんなジミーさんの仕事は、パパイヤ栽培だけには留まらない。元小中学校教諭であるジミーさんは「交流」の専門家でもあり、子どもたちを中心に農園体験をはじめさまざまな交流機会を作っている。

「子どもたちの成長にとって、いろんな出会いや交流を経験することが大事だっていうことは、経験上目に見えてわかってた。子どもは豊かな体験と素敵な大人に出会うことで、素晴らしく育つんです。でもそれを学校だけでやるのは難しい。だから地域で子どもを育てるということをやりたくて、子ども達に自然体験学習の場を提供したり、農園に来やすいように普段から登下校の時に話しかけてみたり、焚き火で焼いた焼き芋を一緒に食べたりしているんです」

　なかでもジミーさんが特に力を入れているのが、2020年11月に初開催した「夢キャンプ」。市内の小学校の校庭を舞台として、Gボール（バランスボール）を使った運動や和太鼓体験、火を使った科学実験などさまざまなイベントを行った。

「筑波大学体操部や、つくばのでんじろう先生こと神立喜文先生、筑波山麓の自然生クラブなど、これまで出会ってきた財産といえる方々が協力してくれました。2020年は豊里地域の小学校2校で開催しましたが、次は6ヶ所、数年後には10ヶ所以上に広げたいと思っています。地域の子どもたちはもちろんだけど、つくば市の子どもたちみんなを豊かにすることが、昔からの夢だから」

■ ジミーfarm

つくば市上郷6230　☎ 029-847-8208

http://www.jimmyfarm-tukuba.net/

Interview04　Hitachinokuni Kamigo Chuo Hayashikai

常陸乃国上郷 中央囃子会

地元の祭り囃子の復活が原点。多世代が集う太鼓パフォーマンス集団。

「常陸乃国上郷 中央囃子会」の親方こと倉持正仁さん。担当は笛とMC。倉持さんの軽快なトークも楽しい公演を、ぜひ見てほしいと思う。

お正月のイーアスつくばで一度は見かけたことがあるかも知れない。「常陸乃国上郷 中央囃子会」は、つくば市の上郷を拠点とした和太鼓パフォーマンス集団。2003年に結成して以来20年近い歴史を持つ団体で、前述のイーアスつくばでの毎年恒例の正月公演のほかにも、さまざまな祭りやイベントで年間50以上の公演を行う実力派だ。「親方」という肩書きで団体を取りまとめる倉持正仁さんをはじめ、下は保育園児から上は80代まで、30人以上の「家族」と呼ばれるメンバーが在籍している。

中央囃子会は、もともとは倉持さんの親世代にあたる現80代の方々が始めたもの。志を同じくした上郷の中央地区に暮らす6〜7人が集まり、最初期には小貝川の土手の水道小屋で酒樽を叩いて練習していたと言う。

「当初の目標は地元の上郷祇園祭でお囃子をやること。というのも、地元にお囃子ができる人がいないので、祭りの時にはいつも千代川村（現・下妻市）からお囃子を呼んでいたんです。ただ、ずいぶん古い話では上郷の中央地区にもすごく上手なお囃子のグループがあったそうで。それを復活させようと始まったんですよ。地元の祭りぐらい自分たちでお囃子やりたいよなってことで」

その後、初代会長から「一緒にやんねーか？」と誘われ倉持さんが参加したことが中

央囃子会の転機となった。
「初代会長から誘われて、私が同年代を誘って、さらに同年代の子どもたちも入れたんです。三世代に広がったことで、お囃子だけでは子どもたちが飽きてしまうので、現代の要素を取り入れた太鼓パフォーマンスという見世物的な形に変化していきました。銀行融資も受けながら太鼓や衣裳も徐々に揃えていったのですが、どんどん仕事をとってどんどん借金返していくぞ！という意気込みでしたね」
　今では太鼓や笛、PA機器から衣裳まで十分に揃い、現在の会長が経営する会社の敷地内に稽古場を借りて毎週練習を行っている。
「以前はほぼ上郷のメンバーで構成していましたが、活動を続けるうちにだんだん広がって、今はいろいろな地域のメンバー がいます。最近では市外からも公演依頼が来るようになりました。町おこしにつながっているかと言われたら、確かにそうかも知れません。町おこしなんてちょっと格好良すぎるけど、それなりにがんばっていると思うし、上郷の名前を広めている実感はありますね」
　地域の祭り囃子の復活を発端に、太鼓パフォーマンス集団として躍進を続けている中央囃子会。本業を持ちながら続けていくのは簡単なことではないはずだが、ここまで続けてこられたのはやっぱり「好きだから」だと、倉持さんは言う。
「小中高校と続けている子たちも多い。太鼓が好き、お囃子が好きという人たちが集っているんです。今はコロナがあって思うように練習ができず辛い時期ですが、めげずにこれからも次世代を育てていきたいですね」

■ 常陸乃国上郷 中央囃子会
http://www.hitachinokuni.com/

Interview05　Wa Wa Wa Yatabeya Chomin Kaigi

わわわやたべや町民会議

静寂のまちに灯をともす、芝居を軸にした町おこし。

江戸幕府第11代将軍・徳川家斉の時代。さまざまな発明で谷田部に尽くしたからくり伊賀七こと飯塚伊賀七を題材に、谷田部の町おこしを行っている「わわわやたべや町民会議」。谷田部の町の真ん中にある元呉服屋「アラキヤ」を寄り合い所とし、伊賀七をテーマに据えたオリジナルの芝居とイベント企画を中心に活動をしている。

会長であり伊賀七座の座長を務める沼尻渡さんは、谷田部で生まれ育ち、青森で教員生活を送ったのち、50歳の時に演劇の世界に専念するために上京したという経歴の持ち主。作・演出を手がけた芝居は全国で公演を行うまでとなったが、東日本大震災で活動できない状態が続いたことで故郷の谷田部に戻って来たと言う。

「わわわやたべや町民会議」会長の沼尻さん（左）と、メンバーの羽田芳夫さん（右）。沼尻さんが北野茨名義で作・演出を手がける「生きろ伊賀七」に、羽田さんも演者の一人として出演している。

「子どもの頃の谷田部はすごく栄えていたんです。生活に必要なものはなんでも揃っていたし、近郊の農家がこぞって日用品を買いに来ていた。でも、青森にいた頃から年に1度は谷田部に帰ってきていたけど、帰ってくるたびにどんどん店が閉まっていった。まさにゴーストタウンですよ。寂しいなんてもんじゃないよね」

寂しさを感じていたのは、もちろん沼尻さんだけではなかった。谷田部の復興を目指す区会メンバーを中心に研究会が結成され、さまざまな人が知恵を搾っていた。そんななか、沼尻さんが提案したのが、長年芝居の題材として温めていた地元の発明家・伊賀七を主人公とした町おこしだったのだ。

「東京で芝居をやっていた頃から、つくばで伊賀七の芝居をやりたいと思って動いていたのですが、実現に至らなかった経験がありました。それが、研究会で話し合ううちにふと伊賀七の名前が出てきまして。やっぱり伊賀七の芝居をやりたい、という気持ちがふつふつと湧いてきたんです」

そんな沼尻さんの提案に初めは誰もピンときていなかったそうだが、少しずつ仲間が集まり、さらには「つくばR8地域活性化プランコンペティション」での採択が追い風となって、2019年、ついに伊賀七の初公演が実現することとなる。

「2019年は1年間に5回も公演をすることができました。さらに、伊賀七座の芝居と伊賀七庵の活動を集約して、町中を提灯で飾りつけた提灯祭りも行いました。これを毎年繰り返していけば必ず町おこしに繋がるだろうと意気込んでいたところにコロナが広がってしまいました」

それでも粛々と、活動は続く。コロナ禍で中止を余儀なくされている公演の代わりにロードムービーを作ろうという案や、伊賀七庵のカフェバー化計画も議論されている。

「コロナ禍で、人と人との結びつきが試されていると思う。疑心暗鬼の時代になり、人が出会い繋がり合えるコミュニティがなおさら大事になっていると思います。だからこそ、ここをもっと繋がりを生み出す場へとグレードアップしていくことが夢ですね」

■ よりあいや伊賀七庵
つくば市谷田部2983

Interview06　Share House "Irorite!"

シェアハウス「いろり亭」

居場所を求める若者を地域と支える、あたたかな共同生活の場。

筑波大学卒業後、新卒で都内の企業に就職するも、心のバランスを崩してしまい1年で退社。そんな自身の経験をもとに、生きづらさを抱えている若者の居場所づくりをしている、「NPO法人いろり」代表の木本一颯さん。高見原でシェアハウスを運営し、共同生活を通じて支援を行っている。

「僕自身、仕事を辞めた後は、両親に引け目があって実家に戻ることはできなかったんです。叱咤激励してくれていた両親をがっかりさせてしまった。そう自分を責めてへろへろになっていた時に、友人の実家に誘われて。そこで友人の祖父母がまるで親鳥のように、僕の心をあっためてくれたんです。そこでの原体験を他の人にも届けていきたいんです」

シェアハウスには、木本さんを含め全国各地からやってきた10人が共に暮らす。ゆっくりでも、あなたのペースでやればいい。そう、少しずつ声をかけてつながりを絶やさないようにしていると木本さんは言う。

「僕だけががんばっているわけではなく、入居者のみんながそれぞれを気に掛けて話しかけてくれているんです。お互いに触発し合いながら、少しずつ状況が変わっていく。そんなゆるやかなつながりを大切にしています」

そしてまた、シェアハウスの外にある地域とのつながりも、入居者にとって大切なもの。「つくばは外から来る人が多い街だからか、地元の方もほんとにあたたかく受け入れてくださるんです。地域の農家さんの手伝いをしたり、おじいちゃん・おばあちゃんたちと芋煮会をしたり。僕ひとりの力でできることは限られている。地域のみんなのお陰で活動ができているので、本当に感謝しています」

■ NPO法人いろり
https://irori-npo.com/

もん主の会

Interview07 Monnushi no Kai

歴史遺産「長屋門」を次世代につなげるために

江戸時代に武家屋敷の建築様式として広まった長屋門。門の両側に長屋がついているのが特徴で、明治期には裕福な農家や商家の家構えに用いられ、長屋部分が農作業場や倉庫として使われていた。全国に分布している建築様式だが、なかでもつくばは200以上の長屋門が現存する長屋門のまち。特に古くから農耕が盛んな桜川流域には長屋門のある家が集中しており、独特の景観をつくっている。

そんな長屋門のある家を受け継ぎ守り続けて居る“もん主”の一人が、塚本康彦さん。住まいのある大（桜地区）は、市内でも特に長屋門が多く残されているエリアだ。

「歴史的価値が高い長屋門ですが、それぞれ個人で所有しているものですから、維持管理の負担は重く、相続などをきっかけに取り壊されてしまうことが多いんです。でもやっぱり、壊してしまうのはもったいない。そこで、大学研究室やNPO法人つくば建築研究会を中心に、長屋門の所有者同士が横のつながりを持って維持管理や利活用の方法を考えていく“もん主の会”が生まれたんです」

長屋門の一部をアートギャラリーとして活用するなど、30年以上前から長屋門活用に取り組んでいるルーラル吉瀬の根本祐輔さんをはじめ、現在10人程の市内もん主が集い、情報交換を行っていると言う。

「放っておくだけでは取り壊すしかなくなってしまうけれど、有効活用できていれば次の世代に残すことができるはず。桜川流域地区の長屋門ツアーや長屋門の宿泊体験（もん泊）などいろいろなアイデアが挙がっています。個人で守り続けるのは限界がある。だからみんなで力を合わせることで長屋門を未来に残していきたいと思っています」

■ もん主の会

事務局：NPO法人つくば建築研究会内
つくば市台町1-8-1
029-886-8039　info@tsukuba-arch.org

つながりづくりを、始めよう。

つくばのまちで、まだ見ぬ人たちとつながってみたい。

その想い、かたちにしてみませんか?

つくば市では、地域まちづくりの始め方を紹介する

ガイドブック「チャレンジ!地域づくり」をご用意しています。

ぜひ本冊子とあわせて参考にしてみてください。

発行:つくば市 都市計画部 周辺市街地振興室

つくば市研究学園一丁目1番地1

Tel. 029-883-1111(代表)